74

青山道醇の『鍼灸備要』について

木場由衣登
日本鍼灸研究会

青山道醇（生没年未詳）は幕末から明治にかけての人で，著名な考證医家である森枳園（1807–1885）の門人である．その旧蔵書に押捺された「青山求精堂蔵書画之記」の印記は歴史文献研究者には良く知られている．ただ，その足跡を知るための資料も少なく，著作は『鍼灸備要』のみである．

『鍼灸備要』は上下2巻全69葉よりなるカナ交じりの和文の鍼灸専門書で，1887（明治20）年6月に今村了庵の序を付して鉛活字印刷で刊行された．のち阪村義一編の『改訂増補古典鍼灸医学体系』（1941–1943）の第13冊に油印収録されたが，初刊本の影印はこれまで一度も無いようである．以下，『鍼灸備要』を調査し，明治前期の日本鍼灸と青山道醇研究の一助とする．底本には明治20年原刊本を使用した．

『鍼灸備要』著作の意図は，道醇の跋に「友人飯塚寛斎，予に告げて曰く，和漢洋病名比例を挙げて，童蒙に便ならしめんと欲して，予に一書を著すを請う．……諸家の説を纂輯し，其の要を撮み，二巻と為し，これを梓に刊し，名づけて鍼灸備要と曰う．敢えて大方の君子に示さんと欲するには非ず，聊か一班を述べて，初学の階梯と為すのみ．」とあることから，当時の時代風潮にそった啓蒙的で簡略な，初学者向きの鍼灸書を作り出すことにあったことがわかる．

『鍼灸備要』の巻上では，先ず「骨度之解」，「同身寸ノ法」，「名同類異」，「穴同名異類」，「刺禁略例」，「廿四脈ノ解」，「禁鍼穴歌三十一穴」「禁灸穴歌四十七穴」の総論的諸章が置かれている．これに続く「諸病的治の要穴」が治療各論に当たる部分で，93の病門に分かたれ，漢名，和名，訳名（当時の西洋医学的病名や呼称），主治穴が列挙されている．主治穴の下には時には「針」，「灸」，「針灸」，「不深」「左右各八穴ハ胸中ノ熱ヲ写す」などの細字の注記が見られる．時に主治穴の後に，更により具体的な鍼灸法を詳述する場合もある．巻末に別に古来の「患門并四花穴法」1章を附す．巻下の前半は，婦人科と小児科が論じられている．「諸病的治ノ要穴」とは異なり，各科の最初に概論を述べ，後に婦人科28病門，小児科13病門に主治穴が挙げられている．後半は十四経ごとに所属経穴とその部位を挙げ，巻末に誤治救急の鍼法と，「癰疽八穴灸法解」と題する古来の灸法を附す．

『鍼灸備要』の病門解説における引用はそれほど多くはない．引用書名が明記されているものは，『医心方』（12回），『千金方』（6回），『資生経』（4回），『素問』（3回）が最も多く，他には『霊枢』（『鍼経』），『甲乙経』，『脈経』，『外台秘要』，『明堂下経』，『聖恵方』，『類経』，『本草』，『赤水玄珠』，『医学入門』，『神応経』がそれぞれ各1～2箇所見える程度に過ぎない．なお書名以外では「崔知悌（崔氏）」，「李時珍」，「薛立齋」の人名，そして「標幽賦」，「席弘賦」，「霊光賦」の鍼灸歌賦が見られる．総じて隋唐から明代にかけての中国医書からの引用が多く，和書からの引用は『医心方』以外では『灸炳要覧』，『脈学輯要』が各1回見えるのみである．

青山道醇の『鍼灸備要』は，江戸期の『鍼灸抜萃』や『鍼灸重宝記』などと同様，鍼灸の一般的な知識と病證に対する鍼灸治法を併記するという体裁を採っている．考證学の系譜を継ぐと思われる道醇であるが，本書の内容に限ってはかなり通俗的である．病證については伝統医学に基づく論理的解説よりも現代医学との比較が中心であり，鍼灸法も対症療法的である．本書の内容は，近世と近代の狭間で衰退していく近世日本鍼灸の1つの象徴となっているように思われる．